

花札の絵柄のリユースデザイン

清水 和輝
拓殖大学
s28632@st.takushoku-u.ac.jp

伊藤 弘樹
拓殖大学
k-itoh@id.takushoku-u.ac.jp

皆川 全弘
拓殖大学
mminagawa@ner.takushoku-u.ac.jp

キーワード:花札, 遊戯史, リユース

1 研究背景

花札は現在カードゲームとして一般的に遊ばれることは少なくなっている花札の絵柄は日本特有の動植物が情景として記されており知名度は低くない。今でも国民の人気を誇るキャラクターにより絵柄がオリジナルなものにリデザインされているほどである(図1)。そのキャラクターたちもまた花札の絵柄の一部として入り込めば一般的な花札の絵柄と違った独特な世界観に一変するのである。そのため、ほかのトランプやカードゲームにはない日本ならではの遊戯である花札の絵柄に焦点をあて花札をリユースし絵柄の魅力を引き出したコンテンツ制作を目的とする。



図1 ジョジョと奇妙な花闘とポケモン花札

2 研究方法

花札の絵柄から読み取れる色覚情報をもとに感情を表現したイラストレーションを作成する。独特な絵柄が用いられている花札にとってその色づかいもまた注目する部分であり、色覚表現を元に感じられる感情を表現する。それにより使用者が花札に抱いている感情を明確に読み取る。花札が持っている独自の色の組み合わせでどのような感情を抱くかを色彩感覚にまつわる先行研究について調査し、花札の絵柄をリユースしイラストレーションとして表現をする。

3 調査と分析

3-1 花札の構成と絵の種類

花札の絵柄は全部で48枚1月4枚の12ヶ月分で構成されており、その絵柄1つ1つにそれぞれ意味がもたらされておりモチーフが存在している。そのモチーフは一年を通して全てが同じモチーフで構成されていると考えていたが、それぞれの月で別のモチーフが存在する事がわかった。江戸時代で当時詠まれていた詩であったり、百人一首の一節であったり、当時の工芸品、掛け軸の絵柄を元にしていたり様々なモチーフの由来が考えられているということが分かった。

3-2 花札の絵柄の種類と由来

江戸時代中期に使用されていた“手書き花札”では絵柄の枠に金縁が採用されており、より高級感を持った絵柄に

なっているが絵柄自体は時折読み取りづらいものも存在した。江戸時代後期の“武蔵野”は同じく手書きの花札ではあるが全体的な色づかいは暗めで構成されている。明治中期から存在する“八八花札”は現在の花札により近い作品となっている。現在遊ばれている花札のイラストとは細部が異なっており、短冊に書かれている言葉がその絵柄が意味している月になっている。

3-3 花札とその絵柄の時代による推移

花札の絵柄はどのカードもいたるところでリデザインされ新しい絵柄もいくつか存在する任天堂から発売されている数種類の花札に着目すると昭和時代に作られた任天堂の花札は和歌が取り上げられておらず普段はカス札には描かれていない短冊が一枚描かれていることがある。動物も豆狸が追加されており“八八花札”から図像の要素が混入されている様子も見る事ができる。花札の中には特定のルールに使用するためにつくられる花札がある。京阪神地域のローカルな遊戯法である“虫花”がそのルール特有の専門札が花札屋で制作されている。牡丹と萩の2枚標を抜いた40枚で構成された花札でそのような花札の場合は絵柄もまた変わってくる。また徳島県で主に使われていた“阿波花”は本来の花札のイラストが独特にデフォルメを施しており非常に魅力的である。その為絵柄はそれぞれ同じと言う訳では無く地方によって絵柄の雰囲気が変わっておりそもそも絵柄の物自体が別物になっているものも見受けられる。花札の絵柄は時代によって移り変わりがとても激しくその時代の特色やルール、地方の雰囲気により大きく変わっている様子を見ることが出来る。

4 今後の計画と課題

作成したイラストがさらにほかの商品にも応用して使うことにより更に花札の魅力はどう引き出すかの検討をする。花札の独特な描き方を特徴にとらえたイラストレーションに注目して作成する。

参考文献

- [1] 江橋崇, “花札”, 法政大学出版局, ものと人間の文化史 167, 2014.
- [2] 一之瀬 武志, “新しい花札入門” http://www5d.biglobe.ne.jp/~sak/hanafuda/atarasi_i_hanahuda_nyuumon_7.pdf (2015/6/12 閲覧)
- [3] 池間 里代子, “花札の図像学的考察 A Consideration of the Iconography of Japanese Playing Cards (Hanafuda)”, 2009.